

浄土

1979-1

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授受郵便誌）第三二五号
昭和五十四年一月一日発行
昭和五十四年十二月二十五日印刷
第四十五卷 第一号



S, KJ

紀南田鶴是仙郷

臨海蒼茫丘又岡

一帶梅林雲靉靆

風前馥郁萬葩香

昭和己未御題丘謹賦

華頂山式細遊至法宏

九十一



丘に寄せて

浄土門主

岸 信 宏

紀南田鶴是仙郷

(紀南の田鶴、是れ仙郷)

臨海蒼茫丘又岡

(臨海蒼茫、丘又岡)

一帶梅林雲靉靆

(一帶の梅林、雲靉靆)

風前馥郁萬葩香

(風前に馥郁、萬葩香る)

昭和己未御題丘謹賦

正 月 号



今、この浄土宗は、もし道綽
 禅師の意によらば、二門を立
 てて、一切を摂す。いわゆる
 聖道門浄土門これなり。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集 P.6)

目 次

＜年頭所感＞

御題「丘」に因みて……………	岸 信 宏 ……(2)
昭和五十四年を迎う……………	藤 井 実 応 ……(7)
年頭に思う……………	藤 原 弘 道 ……(8)
孤独は山になく街にある……………	林 靈 法 ……(10)
昭和五十四年末の年……………	高 畠 寛 我 ……(12)
己未の年頭に当り……………	宮 本 文 哲 ……(13)
合掌する……………	石 井 真 峯 ……(14)
宗教的裏付けを……………	一 条 智 光 ……(16)

〇〇新春五句〇〇……………	和 田 魚 里 ……(22)
---------------	----------------

法 話

新春に思う……………	金 田 明 進 ……(18)
未歳を占う……………	今 枝 二 郎 ……(28)

法然上人の弟子たち⑤

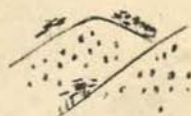
津戸三郎為守のこと〔一〕……………	梶 村 昇 ……(23)
浄土句集……………	一 田 牛 畝 選 ……(32)
念仏ひじり三国志⑤——法然をめぐる人々……………	寺 内 大 吉 ……(34)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部

年頭所感

御題「丘」に因みて



浄土門主 岸きし

信しん 宏こう

○
新らしき昭和五十四年を迎えまして、おめでとうございます。本年の正月の宮中の御歌会の御題は「丘」と仰せられています。丘といえは山を思い出しますが、山といえは大ていの場合に丘を包含いたします。わが知恩院は京都東山三十六峯のふもとの丘に諸堂宇が立ちならんでいます。上段が御廟のある所

で、宗祖法然上人が七十五歳の御時、建久二年（此年十月二十五日承元と改元）二月二十八日に遠流の宣命が下り、讃岐国小松庄生福寺にうつられたのでありますが、同年の承元元年の十二月八日に赦免の宣旨が下り、勝尾寺に五カ年滞在の上、建暦元年十一月十七日（此年承元五年三月九日、建暦と改元）に帰洛の宣旨が下り、同月二十日帰洛せられ、青蓮院の慈鎮和尚の計らいにて、同院の胡摩堂に、おは



いりになり、翌年の建暦二年の正月二十五日におかくれになったのです。この丘の一段は高い所に元祖法然上人様の御廟があり、その下段に勢至堂と称えるお堂がありまして現在の知恩院の建築中では一番古い足利中期の建築であります。この御廟のある丘を大谷の禅房と称しています。

この大谷の禅房の下段の丘に現在の知恩院の中心的建物があり、御影堂とも大殿とも称しています。お堂を中心にして、阿弥陀堂

三門など宗教的行事を修するお堂や経蔵、鐘楼等があり御影堂の後部は廊下で大方丈、小方丈と称している宮殿その他、大法要や種々の大行事に使用する衆会堂、雪香殿などがあり、その他寺務所や内侍、炊事場等の大きい建築があり、唯今は浄土宗務所も知恩院寺務所に続いてありまして、これらの大きい建物皆廊下で続いていますのは実に壮観ともいふべき浄土一宗総本山の次第であります。これらの建物の主要なるものは、多く旧国宝、今の文化財の指定を受けています。知恩院全山の中で中心をなすこの中段は昔は吉水の庵室と称した場所であります。

この故に法然上人が四国へ遠流になりましたまでの常在の場所は、知恩院の現在の全三段をなす中の中段にある吉水の庵室であり、遠流よりお帰りになって、おはいりになった場所、御入滅の場所ともなった場所は大谷の禅房と称したのであります。

○
今、山内の寺院のある所が三段の中の下段にあって、古門、新門のある東海道筋の平地よりは中段に向って少し勾配がついてある平地になっています。宿坊も昔より減って今は十三カ寺になっています。その間に総本山知恩院直属の和順会館が最近に建ち種々の会合や檀信徒の宿舎となっています。その他華頂会館というのがあり、和順会館と同じ性質を持っていますが歴史は大分に古く、宗祖の七百年の御遠忌記念に建てられたようです。開宗八百年の記念に規模の更に大きい地下二階、地上三階の和順会館が出来たのであります。それから華頂学園というのが山内の廃寺となった寺院のあとに建てられ、山内の地所を可成り広く取っているのでありますが、大部分は知恩院門跡が徳川の初期から明治維新まで続きました地所の跡が今の華頂学園となつていたのであります。昔の宮門跡のあとの

一部分に今は得浄明院という御由緒寺院が出来て、昔の宮門跡のあとを嗣がれているのであります。知恩宮門跡の称号は明治御維新に宮様の門跡が廃せられた時に知恩院の住職がその称号を嗣ぐこととなったのであります。

右知恩院の全三段からなる丘上にある施設について、その大体を記したのであります。尚書きのこした分に、上段の丘上に歴代上人の墓碑があります。御廟の北側の一帯が墓地になって居り、信徒の墓地も相当広く取つてあります。現在歴代上人の墓碑は三十基程墓所の北隅にならんでいます。最近には空地がなくなり、第八十世岩井智海上人からは紹隆塔という一基のもとに合同納骨せられることになって居り、私は今第八十三代であります。歴代墓所の北側に塗髪大明神というのがあります。これには種種の伝説があつて、知恩院の一名所となっています。

全三段の中段である吉水の庵室の中には大殿の外に阿弥陀堂、泰平塔、鐘樓堂、経

蔵、靈塔等があります。山内宿坊のある一番低い段丘から男坂、女坂の二つの石段によって中段の吉水の庵室のあとに足をふみ入れた一番の南部の一隅に泰平亭があります。信者の人達の休憩所となっています。今の建築は宗祖の七百五十年の記念建築中の最初に建てられたものであります。石段を上った北側には泰平塔の次に建てられた靈塔がありまして、納骨堂に使われ、地下にその設備ができています。宗祖の七百年遠忌の時に建てられた納骨堂はたしか大阪の信徒小西久兵衛氏の一建立で、この吉水の庵室の東部の少し高い丘の上にあります。その少し東南の丘上に森にかこまれて大鐘楼堂があります。除夜の鐘の中でもその音響が一段と高く太く響いて、それと知りわけることのできるものであります。この古い納骨堂の少し下段の北部に経蔵がありまして宋版と黄槧版とが混合した大蔵經が収められてあったが、湿気が強いために中段と下段との間にある古門の側の版木庫の

中に収蔵せられてあるとのことでした。

大殿と廊下でつながって、この吉水の庵室の趾の西部に阿弥陀堂がありまして朝の勤行には大殿より先に勤行をしています。和順会館と本坊とをつなぐ地下道は、この阿弥陀堂のすぐ北部の廊下につながっています。

知恩院の上中下全三段の丘上の施設の中、最下段には昔から十五カ寺程の宿坊があったのですが、今は十三カ寺存続し、その間に華頂会館と和順会館と華頂学園とがまじっているのです。華頂会館は宗祖七百年忌の記念建築ですが設備も古くなったので最近に改築の計画があるとのこと。和順会館の方は宗祖の開宗八百年の記念に建ちまして、現在知恩院の集会や講義や信徒の宿泊に使われています。また、華頂学園は先づ幼稚園ができ、それから女子収容の中学校、高等学校、さらに短期大学ができて、総合学園となつて、市内でも歴史ある名門学園となっているのであります。

○

以上本年の御題「丘」に因んで、東山三十
六峯下、華頂の丘上にあります知恩院の諸設

備について、朝夕、親しんでいる姿について
概説したのであります。一々文書にあたつて
いませぬので、まちがっている点もあるかも
知れませぬが御容謝を願う次第です。

「昭和己未御題丘謹賦」

紀南田鶴是仙郷（紀南の田鶴、是れ仙郷）

臨海蒼忙丘又岡（臨海蒼忙、丘又岡）

一帶梅林雲霞巖（一帶の梅林、雲霞巖）

風前馥郁萬葩香（風前の郁郁、萬葩香る）

年頭所感



昭和五十四年を迎う

大本山増上寺法主
藤井実応

善導大師の千三百年御遠忌もいよいよ来年となりました。私は前に善導大師の御伝記や著書を拝読していた時、忍激上人が大師の千年忌を記念に『善導大師別伝纂註』をお著しになったその書を拝読していると、元祖法

然上人の御法語が引用されていました。ある時上人は、

「浄土宗の学者（学ぶ人、念仏者をいう）は、この旨を知るべきである。有縁の人の為には、身・命・財を捨てても、偏に浄土の法を説きなさい。自らの往生の為

には、いろいろな煩わしい塵の世を離れて、専ら念仏の行を修しなさい。この二事の外、全く他の営みはない」

と仰せられました。この御法語は『十六門記』と普通申している法然上人の御伝記の「第十門」にのせられているお言葉で、その伝記には「御遺言誠に貴き故に此を記し、末代に聞かしむ」とあります。忍激上人は「我党の学人（浄土の教えを学ぶ人）祖訓（法然上人の訓え）を顧み

ざるべけんや」と示されました。このほか先覚者たちは、この御法語を以て私共を励まして導いて下されていくのです。私もかねて承っていたのですが、『別伝纂註』を拝読していてこの御法語に出合った時、電光にうたれるような衝撃を感じました。「身・命・財を捨てても偏に浄土の法を説きなさい」とは、何という力強く厳しいおことばでありましょうか。思えば、大師も元祖も、その御生涯はこの二事以外、他の営みはなかったものでありまして、元祖さまは自身の御体験をそのまま法語として御遺し下されたのであります。そのみ教えの流れを汲む



年頭に思う

一人として、省みて誠に慚愧に堪えざるものを覚ゆると共に、これより後、どれだけ生かされるかは分りませんが、死生共に阿弥陀如来におまかせして、この後はこの二事以外、他の営みがあつてはならぬと自らに言い聞かせ、この御法語をくりかえし、くりかえしては、このみ教えを体してゆきたいと願うておるのであります。私共浄土の法門に遭うた者の報恩の道もまたこの二事の実践にあると覚えます。各人それぞれ分担の仕事は異なるのでありますがこの二事を離れぬよう、共に精進せんことを至願いたします。

大本山金戒光明寺法主

藤原弘道
ふじ はら こう どう

年年歳歳花相似 歳歳年年人不同

数々の思い出を残して、旧年を去り、新春を迎えるこ

ととなりました。私自身にも身辺に大きな変動が起り、文字通り清忙を極めた一年でありました。と申しますのは半世紀に及ぶ学園生活に別れを告げ、自適の晩年をと

人並の期待をして、東山学園を辞任したのであります。実際重い肩の荷をおろしてホッとしたのも束の間、五月には大本山金戒光明寺法主のご推戴を受け、浅学菲才の身をもって、黒谷さんの聖域に入山いたしました。立派な宗祖のご遺跡での奉仕生活のできることは、何と云っても宗侶として誠に勿体ない限りと感謝の毎日を送っております。

さて現代社会は人間が自らつくった物質文明に押し流され、人間自身のあり方を忘れつつあるのではないでしょう。科学万能に酔って人間自らに対し謙虚さを忘れてしまったような気がいたします。日本という世界稀に見る豊かな国に生活しながら、毎日のように自らを殺し、他を殺傷するといった惨虐な事件が絶たないのは一体何ということでしょう。静かに反省したいものがあります。事件それぞれにいろいろの原因はあるでしょうが、要は自己中心のエゴということに帰着するのではないのでしょうか。相手の気持になって行動すること、即ち他人の憂いをわが憂いとするといった利他の心は微塵も見出すことができません。己れにきびしく、他にゆる

やかにといった仏心も見出すことができません。肉親の子供までを死の道連れにするに至っては実に言語同断の沙汰であります。両親の親元をはなれて核家族の人々には神仏の信仰に無関心の人が多いのは事実であります。幼稚園の入園に際し、保護者の面談をやってきました。が、「あなたの宗旨は」という問に対し「家はまだ仏壇がありませんので宗旨はありません」という答の多いのには驚きの外ありません。宗教に対する無関心さを明かに知ることができます。

かかる現代というこの時勢において、私はまず中年層の人々に対する教化の必要をつくづく覚えるのであります。

毎年新春を迎える毎に、今年こそは明るく正しく平和な一年であってほしいと願うのは凡ての人々の常識であります。お互い手近かな檀信徒同志から堅く手を握って、老いも若きも中年層の人々も、とりわけ団地に住む人々をも忘れないで、正しい浄土の信仰に生きることを切に仏天に誓いたいものであります。



孤独は山になく街にある

大本山百万遍知恩寺法主 林 はやし 霊 れい 法 ほう

ときおり四条のかわら町界限に出て見てはおどろくのである。なんでこんなに人は沢山に出歩いているのであろう。いったい、本当に何か用件があつてであらうか。

人々は混雑をしながら、ゆっくりと流れていくように歩いて行くのである。子供づれの夫婦が、若い男女が、女同士が、そして観光客らしい外国人が笑顔でいずれも楽しそうである。ある者はデパートで今さっき買った品物だろう、うれしそうに握りしめている。そうでなくても何かを求めたらしい晴れやかな包装紙をかかえて、お互いの人ごみの中に更に混雑を加えていくのである。

私はときたまこんな混雑の中を人にぶつかりながら歩くのであるが、いつも自問自答していた。

現代人は本当に楽しいのだろうか。親子夫婦の愛情や

友情というものによって、自分の生活のきづながしかりと支えられているのだろうか。今、こうして歩いている私のまえうしろ、そして右左の人々の顔はいかにもうれしそうである。人生のよろこびに満ちているようでもある。

しかし、と、私の心はくらくらい気持ちになっていたのである。この街中にこそ孤独があるということである。自分の孤独に堪えられない現代人のすがたが、いまこの混雑の街中にあるのだ。こんなことを申して歩いている私には、かわら町界限のこの混雑はたちまち化して、あたかも砂漠のすなをかむような味気ない光景になって行くのであった。

「大いなる都市は大いなる孤独」であると古語にある

ように、大都市に生きる現代人のこの世界は、全くの孤独の世界であるだろう。団地やマンションに生活する人々のすがたがこのことを一番によく象徴している。

向かい合った人やとなりの人の名すら知っていない。まことに植民地的な生活のすがたである。かつての町中や田舎では一丁内、一つの村の隅々までお互いに知り、また知られていた懐かしい思いがいっぱいにあった。

ところが、現代人は実験台の上に離合集散する原子のように、かたくなにただ自分だけの世界に固執して、窓をあけてとなりの原子の窓に向かって呼びかけをしないう。だから相手を信ずることも出来ず、いつも猜疑心に陥ちこんでいる。そして孤独から来る不安に落ちつくことも出来ないのである。現代社会が大衆社会と呼ばれているが、大衆というものの心理はこのようなものだろう。リースマンの「孤独なる群衆」とは現代のアトム化した人間の相を深刻にえぐり出したものである。

実に、孤独なる群衆は、孤独に徹しないのである。孤独に徹するところ、そこから大いなる連帯と共生の世界からひらかれるのであるが、孤独なる群衆は孤独なるひとりに堪えかねて街頭に出るのである。友を呼ぶのであ

る。人間は誰でも実存としては、全くの孤独であるはずである。孤独に徹し、実存を通してそこに始めて大きな連帯の命の世界に運ばれていくのである。しかし、現代の孤独なる群衆は真実の孤独をおそれて、日常的次元の世界での友を求めて、真人生への道たる孤独を蔽い、これを忘れようとする。この忘却のすがたは、街頭の雑踏の中にはかりあるのではない。階級、政党、組合等、すべて没個性的な生きる責任を忘れてアトム化した集団の生き者たちの行動に見られるところである。

孤独に徹するところ、そこから大いなる命の世界に道は通ずる。孤独をさけたり、街頭に走って日常的世界に逃げこむことであってはならない。真に孤独であるということは、真理のために戦っているということである。孤独であってこそ、またそれに徹してこそ、やがて強くもなれるのである。

私はここに黒谷における法然房源空の孤独のすがたを思いおこしている。十八歳から四十三歳まで大比叡の峰から西北の谷合いに二十余町、ここは全くの人間界からはなれた孤独幽暗な湿地である。ここにひとりの青年僧が二十余年の歳月を孤独に堪えぬいたのである。やがて法

然房源空四十三歳の承安五年春三月にいたりて、孤独の世界はぶちやぶられた。これまでの孤独寂寥の中の迷子たるの法然はわが身をとりにくく天地無量の仏菩薩より大悲專注を受けつつある唯一絶対の爰子たるの自覚を得たのである。実に信仰の入門にあたりては、先ず単独者として絶対者と面接せざるを得ぬのである。そこには夫婦も親子も友情もない。ただ実存としての自分だけが対座しているのである。まさに孤独であり寂寥である。だがこの孤独を突破し得てこそ、天地万象の無霊無量の命を真の自己の友として受けとり、そこに千万人の大きな力と感動とを受けとって行けるのである。



昭和五十四年末の年

いま吉水の草庵に法然上人の姿を思い浮べてみる。「念仏の草庵隘しと雖も、恒沙の聖衆雲集して、菴羅園の華座に同じ。三昧の道場狭しと雖も無数の賢聖側塞して靈鷲山の苔庭に等し、まことに念仏者はただひとりどこに座しても、ただひとりどこを歩いていても、常に天地無量の仏菩薩と共にあり」と。その摂化長養の中に感動をもって生きていけるのである。天地万象の広大な命と共に生きる道は、深い孤独のなかからおのずからひらけて行くのである。

孤独は山になく、街の中にある。一人の人間にあるのではなく、賑かな大ぜいの人間の中にあるのである。

大本山清浄華院法主

高たか 畠はた 寛かん 我が

昭和五十四己未の年はわが亡母の干支であります。どうか今年も平和で、わが国の文化文明が益々進歩向上す

ることを祈るばかりであります。殊に我宗に於きましては、近く高祖善導大師の千三百年遠忌を迎えますので、

心を新たにして報恩の実を行わねばならぬと思います。
私は近年、総本山の鹽書道場に出向致し居りますが、その時、初めに大師さまの十四行の偈を読ませて頂きます。これは恩師椎尾弁匡勸学の教えに従ったのであります。その偈文の中に次の偈があります。我等咸帰命 三

己未の年頭に当り



謹んで新年の御慶を申し上げます。

扱て本年の干支は、己（つちのこ）未（ひつじ）であります。由來羊は平和の表象であります。私は干支（えと）の羊に因んで、本年は万事、明るく、正しく、和やか、であれかしと祈るのであります。

私の机上には、岸御門主より頂いた、和と書いた色紙が飾ってあります。これは昨年ハワイ開教八十五周年祝賀記念として頂いたので、それは私が先年ハワイ開教総

乗等賢聖 学仏大悲心 長時無退者 即ち、私共は、声聞縁覚菩薩の三賢聖が仏の大慈悲を学んで、どこまでも進歩向上止まない方々に帰依いたします、という意味であります。この学仏大悲心という言葉が吾々にとりて最も大切な文句であると信じて居ります。

大本山善導寺法主

みやもと ぶんてつ
宮本文哲

長として、些か微力を致したからであります。

和について思い出すのは、聖徳太子の憲法十七箇条の第一条にある「以和為貴」であります。太子は世の中を治めるには和が最も大切だ、和を守る為には仏の教が一番よいと、仏教に深く帰依し自ら其の先頭に立って、仏教を弘めたのであります。それ故日本の仏教界では太子の事を讀えて、日本のお釈迦様と崇めて居ります。

試みに和を字引きで調べて見ると、当然禾部にあると

思うたのに、実は口部の五画にあります。そこで禾偏の元字禾部を調べると、禾が漢字の左側につくと禾偏となる。なお禾には五穀（米、麦、粟、豆、黍）の意味がある。即ち和は大切な食物の偏に口の旁から出来て居るので、食物と口とはいってもどこでも、仲よくしなければ生きてゆけません。これが和の意味です。漢字は中国の昔の文化人が作ったものだが語源を尋ねて見ると仲々面白い。仏教には「天下和順」の祈願文があります。仏教の篤



合掌する

若い頃、お盆になると棚経まわりに歩いた。昔のことだから、今のように車で次から次へかんとんにまわるなどできるものでなかった。そういう場合、しばしば途中

信者、聖徳太子の名句「以和為貴」は、この祈願文が其の語源ではないかと思うのであります。それは兎に角、私は物騒な現代の世相を眺めて、つくづく日本の将来を憂うのであります。そして今こそ仏教の「天下和順」聖徳太子の「以和為貴」の精神が燃え上るべき時だと信じます。時は将に平和の表象羊の年を迎えるに当り、之れに肖（あや）かって起ち上ろうではありませんか。合掌

大本山光明寺法主
石 井 真 峯

で他宗の知らない寺僧と行きちがうことがあったが、私は知らん顔をして通り過ぎることが出来なくて、合掌し、目礼する習慣だったが、先方はバツの悪いような顔をして通り過ぎることが多かった。こういう場合は宗旨にかかわらず、法服を着ているのだから、せめて合掌を

し合つたらいいのではあるまいか。もつとも私はすでに長い間棚経まわりに歩いていないからわからないが、今日、私の希望することが実現されているならば結構である。もしそれが出来ていないなら、全日本仏教会の各地での大会の折にでも議決されたらありがたいことだと思う。私どもの日常生活に於ても仏者たるものは、もつと合掌をして挨拶するのが望ましいのではあるまいか。

二

そこでいつも思い出すのは常不輕のことである。この比丘は、街のなかで他の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を見かけると、皆ことごとく礼拝し、讃歎して言った「我深く汝等を敬う。所以はいかん。汝等皆菩薩の道を行じて、當に作仏することを得べし」。しかもこの比丘は經典を誦誦せず、ただ礼拝を行ずるばかりであった。遠くに四衆を見ても走り赴いて同じ言葉をくり返した。衆人この言葉を聞いて、「或は杖木、瓦石を以てこれを打ちやくすれば、避け走り遠く住して、猶高声に唱えて言わく、我敢て汝等を輕しめず、汝等皆當に作仏すべし」と。彼がこういうことを繰り返すので、増上慢の比丘、

比丘尼、優婆塞、優婆夷が彼を常不輕と名づけるにいたつた。これはご承知のように『法華經』の中にある有名な話である。この物語には合掌という言葉はないが、礼拝するについては、合掌したことであらう。

三

この原稿を書くにあたり、仏教辭典で合掌の項を引いてみたら「左右の掌を合せ、十指を合せて吾心が專一なるを表する敬礼法。支那には拱手を敬とし、印度には合掌を敬とす」とある。

これによると合掌は印度から伝わって来た礼法と思われる。私は今のうちに、まだ多数の日本人が、印度を訪れない昭和二十九年と三十一年と二回印度を訪れる機会をもった。その折印度人が合掌して「ナマス」といって挨拶するのを経験した。昨春秋世界仏教徒會議が東京で開催された時、ある祝宴で印度人と隣りあい、いろいろ話をしたが、その折、訪印の時、合掌して「ナマス」とたびたび挨拶されたが、あれはどういうことかと尋ねたら、午前でも午後でも使つていい言葉だと聞かされた。どういう意味かと聞いてみればよかったとあとで

考えたのだが、私は、徹底して物を尋ねない悪い性格を持っていていつも思う。印度の言葉は何も知らないのかわからないが、日本語の「こんにちは」に相当するのかと思っている。まちがいなら、私の無知を笑われるであらう。

四

光明寺の一室に神奈川教区の教務所があるが、そのガラス窓の外側に可なり大がたのポスターが、昨年夏ごろからはってある。まん中に合掌している色ずりの少女が印刷してあって、その向って右側に「合掌するよい



宗教的裏付けを

大本山善光寺本願法主

いち じょう ち こう
一 条 智 光

昭憲皇太后の御歌に、

茂りたるうばらからたちはらいても

ふむべき道はゆくべかりけり
とあります。トゲ多きイバラやカラタチの生い繁る道で

子」とあり、左側に「南無法然さま」とある。下に「法然上人降誕八五〇年、浄土宗児童教化連盟」とある。実にいいポスターだと思っている。日本中の浄土宗の寺院にはってあれば、まことにありがたいことであるが、大変な経費になるであらう。

なお付言すれば、浄土宗児童教化連盟からこのたいへん結構なポスターが昨年夏から各寺へ配布されているそうである。これは、私どもに合掌の尊さを教えてくれる、本当にすばらしい立派なポスターであると思うのです。

あろうとも目的地に到達する為には払いのけて行かねばなりません。それと同様に正しく生きるには、苦しい困難な社会にあつても、それを乗り越えて行くべきだとの御訓しの御歌であります。申すまでもなく人生は平坦な道ばかりではありません。山あり川あり谷ありで、ある時は経済に行きづまり死を決する事もありましょう。ある時は人と人との葛藤に悩むこともあり様々です。それは「憎い」「妬しい」「くやしい」「欲しい」と仏陀の御眼よりご覧になれば実に穢い浅ましい心で生活をしているからであります。

殊に今の世の中は人智を尽してあらゆる機械化を計り、その機械のために追い廻されているのが今日の私達の姿であります。

それで都会といわず農村、漁村といわずジツクリと自己を見つめる時を失つて居ります。諸々の物質文明の進歩によつて、その恩恵を頂き生活が豊かになつて来ましたが肝心の内面的な淘汰が忘れられて居ることは真に迷惑で決して世の中を明るくする道ではありません。殊にあまりにも利那的享楽や利害損得のみに終始して他の迷惑を返り見ない自由主義や自分の義務に不誠実な民主

義の氾濫していることは真に嘆かわしいことであります。この醜い内面の貧弱さが黒い霧発生^霧の基となり、事故続発の温床ともなっている事に気づかねばなりません。やはり生活の根底に宗教的裏付けを持ちたいものであります。

お互いに日に一度はみ仏のみに手を合せたいものであります。静かに自分を見つめるひと時を持ちたいものであります。生きていることは自分一人の力でなく、先づ第一に命の源であるご先祖あつてのことであり、天地万物あらゆる恩恵によつて生かさせて頂いていると気づくことが大切であります。

そこにこそ生かし生かされている、お互いの人格を尊重することも、人様の立場になつて考えることの出来る「おおらかさ」「謙虚さ」「やさしさ」が養われるのではないでしようか。心からお蔭さまと感じ有難うと感謝することが出来ますなら、それが仏教精神を頂いた物の見方、考え方と云えるのではないかと思います。言うべくして至難なことであります。円満な家庭を築くためにも、地域社会浄化のためにも仏教精神にもとづいて精進いたしたいものであります。



新春に思う

かねだめいしん
金田明進

(大本山増上寺執事長
取手市弘経寺住職)

明けましておめでとうございます。新年にはその昔から、おめでとうと人ごとに挨拶を交わします。昨年一年人生を経験したことが尊い。又ここに新しい一年を迎えることが尊い。人生を次々と新しく旅してゆくことが尊くもめでたいのでしょうか。

私は年のはじめに「初日さす光の中に師よ友よ、みかげにいのらむさきくあれかし」とお世話になったみなさまにごあいさつ申し上げました。私を今日まではげまして下さった先生方、お友達を、年のはじめに思いうかべ心から、おすこやかに、おしあわせにと願うのは当然のことでしょう。

恩師椎尾弁匡先生は、よく信仰は進行なりと教えられ

ました、そして信は真なり伸なり新なりとも教えられました。そのおさとしから言う、新年はまず信念の年であると申されます。新し年は、ただ日月がめぐり来ったと言うのでなく、お互いの信念が更に深まってゆくことと受けとるべきでしょう。即ち人生が信念ある人生に育ってゆくことが新しい人生に立つことです。

正月のはじめに誰でもよく誓いのことを銘記します。即ちこの年はこの心がけでやってゆこうと念ずるからです。先づ今年は信念ある生活をうち立てようと思ふことが望ましいことです。

信念とか信仰と言うてもとかく抽象的ばかりあってはなりません。やっぱり信仰は進行です。昨年と同じ

ことをやっているのでは信念の退化です。新年は進年の年です。進んで自分の生活に鞭うって行かねばなりません。善導大師は「自策自勵、求常住」とお教え下さいます。自らにむちをあてて、自らを励ますことが信仰を求める姿だとお仰せになるのです。

私はかつて、近所の雑貨屋さんの御主人と早起き念仏をしようと約束しました。それも正月寒の入りの朝から一週間ということでした。朝五時から一時間という約束で始めました。私はいつも冬は朝のおつとめが七時頃でしたから、朝五時からと言うには、それこそ自らを大いに鞭うたねばなりません。それでもまっくらな冬の朝、四時半ごろに時計目醒しをかけ、庫裡の重い戸をあけて待たねばなりません。でも一週間は約束通り一時間の早起き念仏が実行できました。一週間つとめるとお互いにはげみがついて、これで止めては勿体ない、もっとつづけようと言うことになりました。

寒中の朝の空気のつめたさ、しかも広い本堂の冷めたさ、その中で二人で大声をあげてお念仏をつづけました。お念仏が終ると二人でいろいろ話し合います。その御主人はその頃お年は六十歳位でしたか、「先生、どう

もお念仏がやめられなくなりました、お念仏していると自分のわるい所がだんだんハッキリしてきて、もっともつとめたくなるのです。おつとめから帰へってお店をあけようとした時私は新しいことに気づきました。お店の戸の「しきい」に私は合掌してお念仏しました、それはこの「しきい」をまたいで毎日大ぜいのお客さまが買い物に来て下さる。有難いと思うようになりました」こう申されました。私は信仰は進行だナと思いました。私も私で、「住職である私が、一信徒にはげまされて、新春早々から早起き念仏に入れた有難い御縁だ」と感謝の中に寒い朝早くおきておつとめすることのよろこびを味わうことが出来ました。

新年になって寒の入りを迎えると戦中のこの早おき念仏が有難く思っておこされ、今は亡きこの雑貨屋の御主人を追慕するのです。本当に信仰は次々と新しい人生をさとらせてくれます。

新は信なり進なりと語ってきましたが、更に新年は真年に通ずると存じます。本当の年まことの年が新年です。私どもの命は両親からうけた命にちがいありません、両親はまた四人の祖父母からうけた命です。三代四

代……と先祖をたどりますと実に何百何千の祖先の命が流れ伝わって父母を通じて私の命となっているのです。新年にはふりかえって遠い万代のいのちを考え、又同時にわが子孫にかぎりなく伝えゆくいのちを味いとらねばなりません。それが新年の目出度い無量寿たる所以であり、まことの年の尊さであると思います。

又新年は伸年であり、伸びゆく年です。子供の成長を見てみると、明かに伸びゆく姿がわかります。柱につけた印でもわかるように子供は日々伸びてゆきます。親の方も背丈は伸びずとも、心に仕事に伸びがなければなりません。とかく親になるとお勉強がおろそかになることが多いのです。よく教えをきき、よく良書をよみ、大人としての教養をつんで伸びゆく人生を体得せねばなりません。よき教えに耳を傾けることは大切なことです。

浄土宗の信者はお念仏を申せばよいのですが、念仏を申す人はよく法を聞く人です。各寺のお檀家の中でも聞法にはげんで下さる人は少ないようです。伸びるためには見、聞き、読み、お勉強することが大切です。

更に又新年は心の年とも受けとれます。わが心を研ぎゆく年でありたい。と同時に新年は身を養う年、健康を

保ちゆく年と受けとりたいものです。仏教では心身一如と申します。心と身体は二つのものではない。一つものの裏表であるということです。よく精神修養と申しますが、精神の修養だけでは人間生活は完うされません。身体がそれについて行かなければ如何に善い教えでも実践することは出来ない。むしろ「からだで仏教を知る」ことが大切です。ですから仏法は体解すべきものと言われます。からだで解らねば真の仏法は味えないのです。

今私は新年の目出度い所以を、信・進・伸・真・心・身の年として考えて来ました。まことに新しい年の始めに当って、このような方面から仏法の尊さを味うことも大切だと存じます。心も明るく素直に、身は達者で働かせて頂く、心の年、身の年でもありたいと思います。

さて今年の「えと」はと考えますと、これは仏教とはそれほど縁のないことのようにですが、その年を十二支えとで力づける俗風もあります、してみると今年は己未であって「つちのとひつじ」であります。十二支と、木火土金水の「えと」(兄弟)を組み合せて年の運勢などを表わします。私は専門ではありませんから深い意味はわかりませんが、「土の弟」の年であり、未(ひつじ)の年で

あります。羊というとは何となくおとなしい動物を思い浮かべます。私は先年アフガニスタンのシルクロードに当るバミヤンの石仏を参拝しました時、あの荒涼たる土と岩石との丘陵に羊の群にあらちちで遭いました。しかも一人か二人の牧童が一本の鞭でこの羊の大群を自在に追いつ養いつしている光景を見ました。羊たちは従順だなぁと思いました。

又私は羊という文字について、昔中学生時代に漢文のお年寄りの先生から教えられたことを覚えています。羊は中央アジアでは神聖な動物で非常に尊ばれる。従って中国にもその風習が伝って文字となっている、例えば、羊の大きいのは「美」しいのである。羊を食べると「養」いになる、又羊を口にする「善」となり、すべて羊と言う字は善いことに使われている、と言われたことを覚えていいる。又「羊頭を掲げて狗肉を売る」などと言う言葉もあるから、上等なおいしい羊の肉、と下等な犬の肉の比べ方であろう。ともかく羊は従順でおとなしい牧童にも容易に飼われる動物である。

今年は羊の年だと言うだけで平和な穏やかな年のように思われる。平和と従順も一つの人間の生活目標としても

よいのではないかと思います。

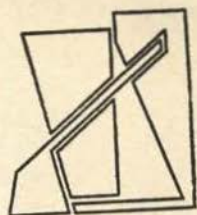
ともあれ、昭和五十四年の新年を迎えて、私どもは新たな心がまえで念仏生活をしっかりと充たしてゆきたいものです。私は昨秋浄土宗の各方面の代表の方々と中国を訪問しました。中国側でも熱烈な歓迎をしてくれました。私たちが訪中の第一の目的は明年一千三百年の遠忌を迎えんとする善導大師の御遺蹟、特に終南山にありと伝えられる大師御終焉の地に御墓参することでありました。法然上人が今から八百余年前夢にもお会いしたかった善導さまの御遺蹟に今参ることの出来る感激は一人でありました。そして浄土教の中国での三祖師（曇鸞、道綽、善導）の御修行された山西省太原郊外の石壁山玄中寺を参拝し、ついで陝西省西安郊外二十キロの終南山神禾原香積寺を訪れ、高祖大師の御墓塔に日本人として始めてお参り出来たのです。明年昭和五十五年、善導大師の一千三百年遠忌を迎えるに当り感無量でありました。今年はそのお迎え待ちの年であり、充分準備を整えて来春を待って、浄土一宗を挙げて善導大師御報恩の誠を尽したいものと存じます。

新春五句

和わ田だ魚ぎょ里り
(俳人)

書始めむとして恐ろしくなりぬ
 大書して画餅の二字に親しめり
 蕨たけて雪女郎瑞々しくなりぬ
 山姥の垂れ乳喰ふ雪女郎
 固まつて十六面水仙菩薩かな





法然上人の弟子たち ⑤

津戸三郎為守のことと〔一〕

梶村 昇 かむらむら のぼる

(亜細亜大学教授)

東京の立川と神奈川の川崎とを結ぶ南武線という国鉄線がある。この南武線に立川から乗って三つ目に谷保という小さな駅がある。駅から一分ほどの所に、この近くでは珍しく大きな神社、谷保天満宮がある。現在の国立市谷保の地である。

天満宮であるから、菅原道真公をお祀りしていることはいままでもないが、実はこの宮司が道真公の末裔である津戸三郎為守によって創められ、現在も子孫があとを嗣いでいらつしやるという。秋の一日、私は天満宮を訪ね、現宮司津戸最氏にお会いし、お話を聞き、宝物を拝見させていただいた。その宝物の中に、津戸三郎について書かれた古い巻物一卷がある。記事は『四十八巻伝』

によったもので、巻末にそのことが明記されていた。

津戸三郎については、諸法然上人伝記の中でも、『四十八巻伝』に詳しく記されているが、これは、この本に先行する『九巻伝』に準拠したものであって、両書を比較すると、このことは一目瞭然にわかる。たしかに『四十八巻伝』の文章は精練されている。それに対し『九巻伝』の方は稚拙な点もないではないが、それなりに詳しく記されていて、生の記事を読んでいる趣きがあつておもしろい。であるから、津戸三郎のことについては、諸法然上人伝記の中で、『九巻伝』がもっとも詳しいものであるといつてよいであらう。

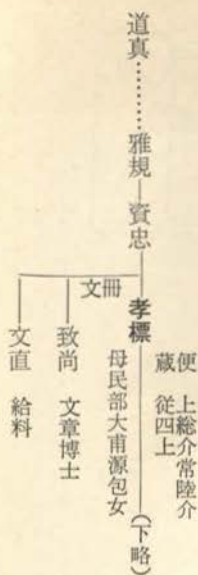
『九巻伝』は延慶四年(一一三二)、法然上人没後一〇

○年に、『四十八巻伝』の編者舜昌によって編まれたものといわれている。この『九巻伝』は、津戸三郎の家系を次のように記している。

天神五代の後胤、文章博士菅原孝標、常陸守に任じて下国之時、武蔵国の惣追捕使、秩父権守平重綱が娘に嫁して、一子を生ず、其名を津戸二郎為広といふ。外祖父重綱が撫育をかふむりて、譜代の跡をつぎ、武勇の道を伝へき。其三男三郎菅原為守生年十八歳にして……

『四十八巻伝』は、この部分を省略して「武蔵国の御家人 津の戸の三郎為守ハ生年十八歳にして……」とだけ記している。

さて、この家系をもう少し詳しく追ってみたい。『尊卑分脈』によると、菅原孝標（『九巻伝』にタカアキラと振り仮名を付しているが、ここでは一般に従う）は、



とあって、彼が天神、すなわち菅原道真公の後胤であり、常陸介であったことは間違いないようである。この孝標が、常陸に下向し、秩父権守平重綱の女をめぐり一子を生む。その名を津戸二郎為広という。孝標といえ、『更級日記』や『浜松中納言物語』の作者として有名な「孝標女」を思い出すであろう。彼女が東国に下ってきたのは、『更級日記』によれば一〇歳ごろであるから、この津戸二郎為広は、彼女の異母弟ということになるうか。孝標は三年ほど東国にいて、一三歳になった娘をつれてまた京都へ帰ってしまう。そこで為広は、外祖父の重綱に育てられることになった。為広は長じて信州筑摩郡津戸郷に居住することとなり、これより津戸という「滝山大善寺志」（浄全三〇・一五五）には書いてある。そして、この為広の三男が、この小論の主人公津戸三郎菅原為守である。『大善寺志』は簡単に、「為広三男武州に居住す」と記しているだけであるから、よく分らないが津戸三郎だけが、信州から武州にやって来たのであるうか。この武州というのが谷保の地をさしているは間違いないさそうだが、それにしても、なぜ為守は谷保へやってきたのであろうか。この疑問はこのままにし

て、少し話を変えて、今度は谷保天満宮の「縁記」を中心にみてみたい。

昌泰四年（九〇一年・七月一日延喜と改元）二月、菅原道真公は、佞者のさん奏によって、筑紫の太宰府に流された。菅原系図によると、道真には十一男三女の子がいたようであるが、その中の一人が、武蔵国多摩郡分倍庄栗原郷（谷保）に配流された。年齒わずか八歳の少年であったが、世を憚って本名を明かさず、ただ「土俗道武」とだけ称したという（『武蔵国多摩郡谷保安業寺旧記附言録』）。この道武が菅原系図の十一男三女の中のどの人に当るものか、よく分らないが、それは、ともかくとして、この道武を預って養育に当った人が、常陸大楲上平太貞盛という人であった。社伝によれば、単に津戸貞盛とあって、この両者は同一人と考えられているが、常陸大楲ならば、筑波山の麓、多気（たけ）の山城に本拠があるはずであるし、貞盛は、栗原郷谷保の豪族でこの地方の県主（あがたぬし）であったのであるから、この両人は果たして同一人であったのであろうか。『江戸名所図絵』には、

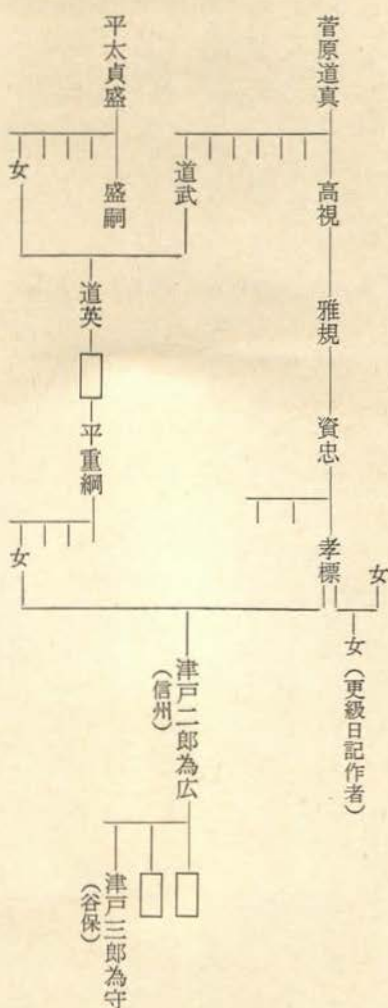
同所二丁許南にあり。空堀城門の跡と覺しき所も見えて、四方二丁あまりの封境なり。土人三郎屋敷跡と

称す。相伝ふ、三郎道武此地に住し、当地の県主上平太貞盛の女を娶り一子を得たり。其子を菅原道英と号す。夫より六世の孫を津戸三郎為守と号くると。或は云、此地は貞盛の旧館なりとも。

と記されている。これをみると、平太貞盛と津戸貞盛が同一人であったようにも思われる。よく分らないが、一応このままで進むことにしよう。そして、ここにいる三郎屋敷は現存していて、人々は今にここを「城山」（じょうやま）と呼んでいる。うっそうとした林に囲まれ、空堀の跡を残し、たしかに豪族の旧館にふさわしい面影を残している。

さて、道武はここに移り住んで三年目の早春に、父菅原道真が病を得て太宰府でこの世を去ったという悲報を受ける。道武は悲しみのあまり一箇の像を刻みあげる。父道真の像である。これが現に谷保天満宮奥殿の厨子深く奉祠されている御神体であるという。貞盛はこの菅公像を天神島（現府中市本宿三丁目）に祀った。道武は長じて貞盛の娘を妻とし、道英を生む。道英は後に津戸家を嗣ぎ、菅原の姓を残すことになる。この道英の六代目が津戸三郎菅原為守である。

以上が谷保天満宮が伝える津戸三郎の系譜である。これは『九卷伝』に記されてないところであるが、さて、この両説はどうつながるものであろうか。両説が必ずしも矛盾するとはいきれない。もし『九卷伝』に出てくる秩父権守平重綱の系図でもあれば、はっきりするので



こう考えてみると、孝標が東国に下向して平重綱を訪ね、その女を娶るのも、同じ菅原の一門であったからであらうと推察できる。その子の津戸二郎為広は、孝標が京都へ帰ったため外祖父の重綱に育てられるのである

あるが、寡分にして私はその存否を知らないので、推察の域を出ないわけだが、この平重綱が、平太貞盛の子孫、すなわち道武の子道英の孫と考えれば、この両説は何の矛盾もなくつながるわけである。少し強引ではあるが、私の推察を系譜にしてみると、このようになる。

が、外孫であるために長じて信州筑摩郡津戸郷に住むようになつたのであろう。『大善寺志』には、「信州筑摩郡の内古馬屋村耳塚村に今も津戸居住の旧地現存せり」とある。

為広の三男が津戸三郎為守である。三男ではあるし、

津戸家代々の地である武州谷保の地に居住したものである。吉田東伍氏の『大日本地名辞書』には、『津戸』の項に、「谷保の旧名にやあらん」とあるが、「旧名」というほどのものではなかったのではなからうか。『谷保』の項には、「谷保村は分倍庄栗原郷と称す」とあって、津戸の名は記されていない。ただ谷保の地に、豪族津戸氏が住んでいたために、津戸とも呼ばれていたという程度のことでないだろうか。現官司津戸最氏は、今この地区に津戸姓を名乗っているものは、二、三しかない、と言われているが、津戸が旧地名であれば、津戸姓はもっと多いはずではなからうか。

しかし、ここに津戸氏が住んでいたことは、今、天満宮に保存されている板碑が証明してくれる。これは府中本宿の弥勒寺跡より掘りだされたもので、上部半分が欠けているが、現存の下部には、はっきりと、

津戸勘解由左衛

子剋死去

延文五年七月十五日

沙弥道繼

門尉菅原規繼

と読める。津戸勘解由左衛門尉菅原規繼が、延文五年七月十五日子剋に死去し、沙弥道繼がこれを建てたというのである。下部にわずかに残っている蓮台からみて、上部には三尊種子が刻まれていたのであろう。延文五年（二三六）とは足利義詮の時代で、津戸三郎が亡くなってから一二〇年後くらいに当る。『大善寺志』は、この板碑を図示し、「是為守が子孫なり」と記している。

為守のことは、残念ながら『尊卑分脈』や『吾妻鏡』にその名を見出すことができない。たしかに熊谷直実や宇都宮頼綱らに比べれば、鎌倉幕府での比重は軽かったに違いない。それが名を残さなかった理由であらうが、法然上人門弟としての為守の存在は、大変なものがあつたと思われる。記録のことをいえば、『吾妻鏡』の巻四十八、正嘉二年（一二五八）正月一日の条に、庭の東座に着坐した一二〇人の中に「津戸新民部丞」の名がみえる。『大善寺志』は、この人は津戸三郎の子守朝の一子で、為忠と記している。孫の時代になって、漸く歴史に名を連ねるに至ったのであろう。

（つづく）



未歳を占う

いま 枝二 郎

(大正大学専任講師)

未歳はひつじどしである。『論語』八佾第三に「子貢、告朔の餼羊を去らんと欲す。子曰く、賜や、女は其の羊を愛む、我は其の礼を愛む」と、月ごとの朔つまり月はじめを宗廟に報告する礼に、羊を供える話が見える。

これは、羊が古くから神聖な動物と考えられていたことを物語るもので、『説文』にも「羊は祥なり」と、羊が縁起のよい動物として説明されている。

世の中にある、又は生じる事物を祥瑞或は災異で説いている古典が多い。祥瑞として知られているものでよく知られているのは、鳳凰・竜などで、それらについては

特に述べなくても、それとなく誰もが感じとっている。ところが羊は「めでたい動物」というより、おとなしい性質をまず思い浮かべて、祥災の方から見ると人が少ないのではなからうか。性質がおとなしいため、単独で行動すると外敵に襲われ易く、そこで集団行動をとるようにするのであるが、すばやく単独行動して攻守に敏捷性のある犬と異なり、むれをなす羊を基にして「群」という文字の形成されているのは、もっともなことである。

羊が温順さで我々に結びついているとしても、『説文』に述べられている「祥」は、まさしく「神」と「羊」と

でなっている文字であり、鳳凰や竜のように華ばなしい祥瑞には感じられなくても、「祥」という文字そのものに「羊」が含まれていることによって、羊がめでたい動物とされていたことがわかるであろう。因みに、「祥」のほかにも、「美・善・義」など、よい意味の文字に「羊」の含まれているのを見出すことができる。

羊にまつわる逸話は大変多いが、秦を倒し、項羽を破って漢帝国を樹立した劉邦が、まだ一市井人であったころ、羊の角を抜いて尾を落とした夢をみたという。「羊」の角と尾をとると「王」という文字になり、劉邦は夢にみたとおりの漢の高祖として帝王の地位に即いたのである。これは、羊を夢みるというのが祥瑞として説かれているものである。

羊が直接祥瑞として述べられていないものでも、神秘的動物という意味で登場する場合がある。『列仙伝』の葛由の条に、葛由が周の成王のころ、よく木の羊を刻んで売っていたが、あるとき羊に乗って蜀の地に行き、蜀の国内の王侯貴人たちは、皆葛由を追って綏山に登り、仙道を得たという話がある。また、『神仙伝』の黄初平の条には、黄初平が羊飼いをしている道士に見い出され

て金華山に行き、家の者に四十余年行くえ知れずになっていたが、兄が道士に市で遇い、弟に再会することができた。そのとき、羊はすべて白い石に見え、初平が「羊よ立て」というと、白い石は悉く羊に変じたという話がある。これらはいずれも、神仙と羊との関係が述べられているもので、羊がただの動物ではないことを示している。『神仙伝』には左慈の条にも興味深い話がある。

左慈は字を元放といい、五経に明るく星占いにも通じていた。魏の曹公が左慈の仙道を体得したことを聞きつけ、石室に閉じこめて左慈の実体を調べようとした。左慈は自分の生命の危険を察知し、脱出してしまった。曹公はいよいよ左慈を亡きものにしようと追手を向けるが、左慈は羊の群の中に紛れ込んでしまい、追手にはわからなくなる。左慈が羊に化して群羊中にいることによって難を避けるところに、羊の神秘性と魔除けのはたらきがうかがえる。それが一層神秘的なのは、『墨子』に見える、春秋時代の齊の荘公の臣の話である。荘公の臣に王国卑と中里微という二人の臣がいた。この二人は三年間に亘り訴訟で争っていた。そこで荘公は二人に一匹の羊を神に供えさせ、羊の血をそそぎ、それぞれ偽り

のないことを神に盟もつわせた。王はすでにその言葉をおえ、中の言葉になったが、その言葉の終わらぬうちに羊が起ちあがり、二人に触れたかと思うと、二人とも死んでしまった。齊の人びとはこれを神のお告げと思ったという。

さきに述べた羊の魔除けについての例をもう一つあげよう。『太平御覽』に引く『雜五行書』に、「羊頭門上に懸くれば盜賊を除く」とある。羊によって災を防ぐことができるというのは、羊に神秘性を感じていたからであろう。

羊の神秘的性格を示すのは、単に羊としてだけでなく、一角羊とか青羊といって、羊の形状や色彩についても述べられていて、羊に触れて偽りのある者は生命を断たれるというのと類似の話が王充の『論衡』に見られ、そこには一角羊が出ている。他にも、『竜魚河図』に「羊に一角ありて、これを食らへば人を殺す」とあり、これと異質ではあるが、『白沢図』には羊に一角があつて、頂に竜のいることがしるされ、祥瑞の代表である竜と羊の結合がみられるのは面白い。

『述異記』には一角羊ではなく、六角羊と三角羊のこ

とが見えるが、いずれも羊の神秘性を示しているとみてよからう。

羊の色彩についてみると、青羊が老子とかかわりて『尹喜内伝』に見えるほか、『搜神記』には黄羊がかまどの神の形として現れ、そこに黄羊がいたのでこれを祠まつったとあり、『続異記』には「毛の色、丹光のごとく、輝きて室に満つ」と色彩にも神秘さが現われている。白羊は別に不思議ではないが、前述の羊が白石に化するという、石と羊との関連で、『金楼子』に羊が石に化したとあるのは、羊の変化思想であり、羊が意外に現実離れた面を備えているのである。

羊のこうした神秘的な反面、現実には牛より羊の方を犠牲にした方がましであるという考え方で、『孟子』にある話は有名である。その話というのは、王が堂の上で眺めておられたとき、堂の下の路を牛をひいて通るかかった者があつた。王が、「牛をどこへ連れて行くのか」とたずねると、牛をひく者が「鐘ができましたので血祭りにするところでございます」と答えた。すると王は「しおれて牛が死に場所へひかれてゆくのは見ていられない」といった。「血祭りを止めましょうか」と牛を

ひく者がいうと、「それは止められない。牛の代わりに羊を使え」と王は言った。孟子は後でそのことをもち出して、王に牛と羊と変わりはないでしようと、政治論を熱っぽく語る。王は羊より牛を大切にしているわけであるが、羊は神に捧げられる運命をもっていたのであろうか。孔子の礼と羊との比較はその一端であらうが、それはやはり羊にある種の靈性を感じていたからであるとも言えよう。

ただし、羊には全く別な意味で人の目をまどわす点もうかがえる。多岐亡羊の語はそれを示しているが、これは、追手を羊に化して避けたという話と関連がないわけではない。

漢代の話しの中にも、梁文という者の家の近くに祠ほくらがあつて、あるときこの祠の中から人の声がするので梁文が声をかけてみると、中から手を入れなさいという答えがあつたのでそのとおり手を入れてみると、それは羊であつた。その羊は近所の家のもので七、八年もの間行くえのわからなかつた羊であることもわかつたという。見

失うということに神秘性の加わっている話である。唐代の李審言が羊に化したのは、亡羊ではないが、羊の変化、人の羊への変化などいづれも少しづつ関連がある。

冒頭で触れたように、羊は神に供えられることの多かつた動物であり、いわば犠牲になつてきた動物である。ところが、文獻に現れている羊の多くは、神秘的なるがゆえに神に捧げられたのであり、人を守るのに大いに貢獻もしている。羊はどちらかといえばおとなしく弱々しく見えるが、実は鳳凰や竜に伍して祥瑞の雄であつた。「羊は祥なり」ということは、『説文』だけでなく、『春秋説題辭』にもはっきりそう記されているから、文宇どおり「ひつじどし」、即ち「未歳」を祥の年と受けとめて、一年の計をたててゆきたいものである。災難がもし訪れそうになつても、羊の魔除けの威が発揮されるであらう。ただ心に緩みをもてば「亡羊」を感じるであらうし、「羊頭を掲げて狗肉を売る」という看板倒れにもなる。心をひきしめて祥瑞の歳を活かしてゆきたいものである。

浄土句集



大姑小姑に仕へ木の葉髪

福岡 林 澄山

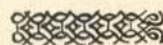
評

世の中も変った。姑が嫁に順わねばならなくなった。嫁いで来た時は姑にいじめられ、息子に嫁を買ったので、いじめ返してやろうと思っていたのに、こんどは嫁からいじめられる。こんな世の中に姑に仕えるばかりでなく、夫の姉妹の小姑まで仕えて呉れる嫁は昔風であるが、実家の両親の育て方が、余程よかったに違いない。嫁貰うなら親貰えとはよく言ったものである。こんな女は木の葉となるのも早かるうが、そんなことには気にもしないよい女と思う。

坊守の一日のはじめ落葉焚く

山形 松田 允子

一田牛畝選



評

坊守は偉だ。大きな家に居て、広い庭を持っていて、これが一般の人々の住職の妻に向けられる目らしい。然し大きな家と広い庭の掃除のことは、みんな考えて呉れない。落ち葉を掃き集めて焚くことが一日のはじめとの作者には、それから次から次へ仕事が続いていることならん。朝は早く起きて夜は遅くまで仕事する坊守は、人気がよく、寺も栄える。

赤飯は敬老の日の患者食

福岡 原 敬二郎

評

作者は病院の院長先生で、病人の食事には、色々心を配られているらしい。入院患者の敬老の日の赤飯は、無ぞかし子供のようにって食物ばかりを楽しんでいる老人にとっては嬉しいことならん。

滋賀 松尾 郁芳
祖師偲び寺庭婦人と京の秋

評

お寺の奥様達の研修会が本山で行われた。折角京都に來たついでにお祖師様の御遺跡を探って報恩ごころに京の寺々を巡るのは意義あることで、楽しいであろう。殊に京の秋の御遺跡の紅葉は殊の外であつて、京の名所旧蹟にも詳しい先達らしい。

秋空を仰いで曲る背をのぼす

大分 姫野シズ子

評

歩く道々には秋の草が花をつけ、そして立ち停まれば自然と空を仰ぎたくなる。その空はどこまでも澄み渡っていて気持ちよく、大きな深呼吸をすれば、穢れた身も心も清められ、よみがえつて来る思いがして、六根清浄となったよう、いとも爽やかである。

福岡 高良 慈風

返り咲く大本山のつつじかな

山形 松田 光替

懸大根くぐり郵便配達夫

群馬 島津 か寿

ひろひたる銀杏供えし地蔵尊

埼玉 黒田 豊子

ほそぼその虫をききつつしまい風呂

東京 遠田念悦坊

野仏に野菊手折りて供へけり

東京 猪瀬 幸子

母に似し秋の石仏なつかしく

東京 栗原やえ子

霧晴れて山高々と花薄

東京 真野よし子

吾のものと思いつ一人月拝む

東京 真野 竜
カクテルの色 紅や月の宴

東京 阪入志津枝
電気鋸耳馴れしまま夜永かな

東京 栗原とも子
鉦叩きつつ一人を楽しめる

東京 鳥居 千代
咲き乱れたる萩池に映つりおり

長野 原 幽遊
朴の葉を落す鳥あり山静か

三重 森 静枝
暮なづみ捕へし蟬を放ちやる

広島 香月てい子
門前のお地藏様に月拝む

山口 三井 寛静
鉦うって送る仏に盆の月

福岡 荒牧 還愚
舞和讃身意柔頼十夜衆

福岡 永江 隆子
キアワアとはずむ声援運動会

京都 安藤 寛
鳥を追うテープの反す夕日かな

福岡 前田 秀峰
小春日の欠くれば猫の背伸びかな

福岡 国友 星畝
銀婚の記念樹植えて月の宴

福岡 楠藤みきを
授与さるる中興号や天高し

福岡 行正 明弘
稲架たわみ穂先大地へつかんとす

一田 牛畝
拝鎮の盃まわし年酒かな



念佛ひじり三国志

(五)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

武装した荒法師たちはついに法本房行空の小屋へ侵入していった。

明遍は堤の上から遠望しながら固唾(かたず)をのんだ。いまにも行空が引きずり出されてくるのではあるまいか。それも全身をずたずたに斬りさいなまれた姿で。

そんな事態になったら、どうしようか。

のみこんだ固唾が、心ノ臓を突き刺し、全身がふるえるのを、明遍は自覚した。

情ない男よ。

そんな自分を嘲けるもう一人の明遍が実在する。

仏法の道へはいつて何十年になるであろうか。人間生死の問題を仏典をとおして学び続けてきたが、いまなまなましい修羅場に直面して、恐れおののく明遍なのである。

行空の小屋を遠巻きにして周囲の小屋の住人どもが不安の視線を集めている。所詮は自分もあの群衆の一人に過ぎなかった事実を認めざるを得ない。生死の道に安心を与える指導者だなどとおこがましくて言えたものではない。

光堂にこもった修法も、まるで形ばかりの無意味な歳

＜武装した荒法師たち＞



前号のあらすじ

久我通親の急死にはミステリイの気配が漂っている。「犯罪の陰に女あり」とはミステリイの常套手段ではあるが、久我通親の場合、その女とは我が娘承明門院在子であった。娘といつも後妻藤原範子の連れ子で、血のつながりはない。しかし、娘には違いなかった。己れの栄達のため、娘を強引に後鳥羽上皇の側室としながらも、妻範子に先立たれてからは欲望の対象を、あからさまに我が娘へとむけた久我通親である。そんな養父との異状な関係に、上皇が疑いを持ち始めた時、承明門院が養父に対して殺意を抱いたとしても不思議はない。殺人の三大動機―痴情・怨恨・自己保身―のすべてを承明門院に見出すことができるが、久我通親の死後、にわかに廟堂において頭角をあらわした承明門院の叔母藤原兼子の姿を見逃すことはできない。

月に思われてならなかった。

やがて荒法師どもは小屋から出てきた。行空の姿はなかった。侵入したときと同一の人数である。

小屋の内部で行空を斬った形跡はない。荒法師の一人が遠巻きになる群衆に問いただす声が明遍の耳にも届いたからである。

「この河原に念仏ひじりが住んでいるはずだが、誰か知らんか」

群衆は無言、無表情で答える。

荒法師たちは明遍や湛空が立つ堤にまで登ってきた。ゆきがけは無視して駆けおりていったが。いま初めて明遍たちの存在に気づいたらしく、

「法本房と申すひじり、ご存じないか」

正信房湛空へ親しげな視線を投げながら荒法師の一人が訊いた。

松丸坊という男で、湛空は叡山の無動谷で何度か顔を合せたことがある。

「そのひじり、何かしたのか」

湛空は冷静な表情で問いかえした。

「不埒な所業を働いておる。丹後局どののご依頼でわれらはその行方を探索中のごさる」

「丹後局……」

湛空はかたわらに立つ明遍をうかがってきた。そちらの話、とでも言いたげである。

丹後局——高階榮子のことである。榮子は、わが娘宣陽門院を奪い返すべく比叡山の暴力へも口をかけたにちがいない。まさに手段をえらばずであった。比叡山には後白河法皇の恩顧を受けた衆徒が幾人もいた。

それにしても、と明遍は冷えた気分になった。

高階榮子は、自分に行空との話合いを頼んでおきながら、同時に暴力の手段にまで訴えているのである。この二筋の縁がへたに交錯したら明遍自身も危険の渦へ呑みこまれる。

荒法師たちが堤の道を遠ざかると、行空の小屋を遠巻きにしていた河原の群衆も輪をほどこいて、めいめいの噂へ散っていった。

そのなかから一人だけ、いちばんきたならしいボロをまとった乞食が、ゆっくり堤を登ってきた。明遍に向けた黒い泥まるけな顔が笑っている。

「終ったようだな」

「……行空ではないか」

絶句したいほどであった。

さっき別れたばかりなのだ。その折はきちんと黒衣を着した私僧姿だった。それが今、ボロをまとい顔には泥を塗りたくっている。荒法師たちが見落すのも道理だ。見事な変身ぶりである。

「こうでもしないと、いつやられるか判ったものではない」

「よく危険が察知出来たな」

明遍はあきれて訊く。

「あれが教えてくれる」

行空は顎で遠い天を示した。

「鴉がか」

枯木が堤の上に立っている。その枝に数羽の鴉が群らがついていた。

「おぬしらと小屋の前で別れを告げているとき、あの鴉どもが飛び立った。怪しい者が接近したことを教えてくれたのじゃ」

「平常から鴉どもを番人として手なずけているのか」

「馬鹿を申せ。そんな閑はない。鴉とて怪しい者が接近すればうたえる。わしらと同じ仲間じゃからな」

「鴉と同じ仲間……」

「わしらは一介の乞食ひじりじゃ。誰の保護も受けておらぬ。いつ斬り殺されても文句は言えぬ。おのれの身は自分で守らなければならぬ」

暗にお前らのように身分のある僧とは違うのだ。と主張している。ということは、つねづね民衆に仏法を説く折も命を張っているのだ、と自負したいようである。

明遍には一言もなかった。弱々しく問い返すだけである。

「そんな危険を覚悟で仏法を説くやりかたを誰から学んだのか」

「法然のご房じゃ。あのお方は表面おだやかな篤者にみえる。しかし、お心のなかはいつも不惜身命じゃ」

「不惜身命……」

「念仏をひろめるためには、ご自分はいつ死んでも惜しまないお覚悟でいらっしゃる。そこが南都北嶺の学匠どもと異なる点じゃ」

「……」

「長袖の身から出家した者には真似も出来ぬだろう」

長袖とは貴族をさしている。明遍は鋭くおのれの正体をえぐられた思いであった。いかに世捨て人を自認しても明遍自身には不惜身命で仏法に取り組む姿勢は絶無だったと言える。

「それにしても叡山の荒法師どもが、なぜわしをねらうのだろうか」

行空は、襲撃の真意をさぐろうとする。

「うむ。やはり宣陽門院姫君の行方を探がしているのじ

や」

「それは、おぬしとて同じであろうが」

殺氣が行空の眼路にたちこめた。

「いや、わしとは無関係なのだ。じつはわしに依頼した丹後局はふた股をかけおった」

「丹後局がふた股？」

「つまりだな。表通りからはわしを使っておぬしの説得にかかった。裏道からは荒法師に頼んで強奪じゃ」

「それが同じ時刻におこなわれるということは……」

明遍も丹後局とグルであろう、となじりたげな視線であつた。

「いや、同時刻をえらんでわしをもおとし入れようとする異なのじゃ」

「またしても異か。おぬしら長袖の人にかかる、すべてが畏になってしまう。どの道も畏だらけでまっすぐには歩けぬということじゃ」

行空は大口をあけ、声高らかに笑い飛ばした。

侮蔑と呪いをこめた哄笑であつた。

明遍も何ということはなく同調して力なく笑つた。あわれな追従笑いになっていることが実感され、いよいよ

気分は減入つた。

二

浄土寺二位、高階栄子が血マナコになって法本房行空の身辺にわが娘の行方を求めたのは、まさに見当違いであつた。たしかに一度は行空の小屋に宣陽門院は現れている。

だがそれは、明遍が見とおしたように「畏」であつたかも知れない。高階栄子らの眼を四条河原へひきつけるためのものだ。

では、なぜそんな「畏」を仕かける必要があつたのだろうか。未だ高階栄子の政治力が宮廷で余命を保つていたからである。久我通親の急死によって、かえって後白河法皇側近の貴族たちは高階栄子の周囲に結集しつつあつた。丹後局ひとりだけなら、この結集勢力はじきに拡散してゆくであろう。宣陽門院勤子は何と言つても故法皇の血を受け継いだ娘なのだ。しかも彼女は「長講堂領」という大荘園の所有者である。人は利慾によって離合集散するものだ。

高階母子の分断……宣陽門院はその時機、卿二位兼子

によって軟禁されていたらしい。

かなり時を経てのことであるが、高階榮子も宣陽門院も後鳥羽上皇の側近に姿を現すようになる。ただし、このとき宣陽門院はひとりの養女の母となっている。六条宮がその養女で、承明門院が後鳥羽上皇との間でなした娘であった。つまり大莊園「長講堂領」を直系の娘六条宮の名義に書き替えた時点で、ようやく高階榮子母子は宮廷で安定した椅子を与えられたことになる。

当然のことながら、そのころの高階榮子には往年の政治力も覇気も完全に消え失せていた。

権力を支えるこの財産をめぐる暗闘の波は、大小の差こそあれ念仏ひじりたちの頭上へハネかえっていった。事柄が教団活動であっただけに、波の散布者は南都北嶺の衆徒勢力である。

安元元年（一二〇四）の十月、延暦寺の衆徒は座主の真性に専修念仏の停止を訴え出る。理由は、法然の門弟のなかに専修弘法に名をかりて放逸の業をなす者が多い、と指摘した。

この時点ではあからさまに指名はしないが、後年くり返された念仏停止の訴状で判明してくるように、放逸の

門弟とは法本房行空であり、安樂房遵西である。

行空の場合、指弾された行状があくまでも個人ブレイに限定されている。熾激な一念義である。法然もこれをかばいきれなかった。やがて行空を破門するに至る。

安樂房は事情がいささか異なる。六時礼讃の興行に風紀上の問題があったとは言え、それは外見上のもので、逆に念仏信仰の熱気と解釈出来る。むしろ指弾がねらうところは安樂房の政治性にあった。

早くから鎌倉の武士たちと接触している。とりわけ後鳥羽体制とはあい容れ合わぬ北条家との仲が深かった。しかもこうした基盤を背景に、安樂房は念仏ひじり集団の組織者としての地歩を固めていた。彼を破門する理由も、意志も法然にはなかった。

やがて安樂房は後鳥羽体制の術中にはまりこみ、法然自身も流罪になるという大弾圧へとエスカレートしていったのである。

延暦寺の衆徒たちが複雑な権力配合にからんで、念仏教団へ不穏な動きを指向しつつある気配をいち早く察知し、対策に奔走する念仏ひじりもいた。

正信房湛空もその一人である。

湛空は徳大寺家の出身と言われ、幼少から比叡の黒谷、叡空の門にいた。当然法然とは同門である。

だが彼は未だ比叡山と絶縁したわけではない。叡空流の念仏を懸命に護持しようとして奔走しまわっていた。法然門下に言わせれば純粋な専修念仏者ではないわけである。

四条河原の事件がきっかけとなり、湛空はしばしば光堂に明遍を訪ねるようになっていた。

話題はもっぱら唐代における宗派教団の法的内容を明遍から聞き出すことに限られていた。つまり新しい教団たる専修念仏宗をいかに合法化するか。湛空はそこに宗教者としての情念をふり注いでいるように、明遍には見えた。

「嵯峨の小倉山に二尊院という古い寺がございます」

ある日、いきなり湛空は言いだした。

「嵯峨上皇の造立になる寺であろう」

「はい。慈覚大師が唐から伝えた常行三昧念仏の最初の寺でございます」

「いまはもう廃寺になっているという話ではないか」

「荒れはてて、ろくな伽藍もございません。しかし明遍

どの。この二尊院を復興し、本山として整備した場合、念仏宗は唐相承の教団となって南都北嶺にも容認されるではないでしょうか」

慈覚大師は入唐している。彼の地でじかに常行三昧念仏を学んできた。その大師が造立したこの国最初の常行三昧堂である二尊院は念仏宗の本山となる資格があるだろう、と湛空は熱っぽく語るのである。最澄や空海が比叡や高野を開山したのも同じ理屈ではないか、と強弁する。

「筋道はそうじゃが、勅許がおりるか否かはその時の政治情勢による。現に比叡山には立派な常行三昧堂が実在している。おぬしが申す専修念仏が果たして……」

唐相承の念仏宗になり得るかどうか。明遍はいつも言葉を濁して湛空を帰した。うっかり言質は与えられぬのである。明遍の発言は、やはり当時の仏教界へ重大な影響をもたらすからである。三論の学匠と言うだけでなく、明遍は信西入道の遺子として桑門系閥の頂点にも立っていた。

三井寺の澄憲、南都の覚憲、行賢、笠置の真憲、トツブクラスの名匠たちとはみな兄弟の間柄だった。

その日、湛空は未知な念仏ひじりをともなって光堂へあらわれた。元久元年（二〇四）の夏七月末、暑気の深い日であった。

聖光房弁長だ、と連れのひじりを湛空は紹介した。

「証真門にいた弁長どの」

名前はすでに聞き知っていた。

「一度、お目にかかったことがございます」

と弁長も言い添えた。

文治年間、大原でおこなわれた念仏談義（―大原談義）の折、弁長は師の宝地房証真に随って出席していた。明遍も招かれている。

「ところで、鎌倉將軍は亡くなられたそうじゃな」

明遍は昨日もたされたホットニュースを話題にした。

鎌倉將軍とは頼朝の子、頼家である。伊豆の修善寺に療養中だったが、命数が尽きた、と昨夜ある公卿がもたらしてくれた情報であった。

「風呂場で弑せられたという話ですよ」

湛空はすでに知っていた。それも明遍の情報源よりはもっと精度の高いものである。

「殺されたのか」

「間違いはありますまい、しばしば鎌倉へ出向いているひじりが伝えた話ですから」

「誰の手で殺されたのかな」

「さあそれは……しかしあの將軍家は乱心の方で、念仏者を捕らえて、まとっている黒衣を焼いたりなされました。いずれは非業な運命が待っていたはずでございませう」

「北条の手にかかったのかな」

「存じませぬ、そこまでは」

湛空は慎重に口をつぐんでしまう。

修善寺に幽閉された將軍頼家はすでに北条氏の監視下にあった。そればかりか実権は弟の実朝へ移っており、その実朝へ御台所として坊門局の妹が興入れする話も決定していた。安楽房遵西が奔走した婚儀である。遵西の口から鎌倉の現情は、念仏ひじりたちは手に取るように知っていたはずである。

三

「明遍どの。専修念仏へ加わるお考えはありませぬか」
將軍頼家の話題がひとわり語り尽くされると、聖光

房弁長が突然切り出してきた。

「わしが専修念仏へとな、突っ拍子もない」

「そうでしょうか。ご実兄の遊蓮房さまは法然ご房とは無二のご法友。また三論と専修念仏とは無縁とは申せませぬ。唐に念仏をひろめ、法然のご房が「偏依」されていらっしやる唐の善導大師もほんらいは三論の出身です」

弁長はおだやかで咄々とした口調であるが、粘り強く語り続けてゆく。

唐の善導が初めて出家したのは、山東の密州に住した明勝法師の門であった。明勝は三論の大学匠嘉祥大師吉蔵の法弟にあたる。いわば三論宗から念仏門へ転じたのであって、むしろ正統なコースなのだ、と弁長は力説する。

明遍自身、近ごろとみに念仏へ傾いてきているおのれの思想を認めないわけにはいかなかった。

だが今、正面きって勧誘されると、俄かに背けぬ遅疑逡巡が明遍にはあった。貴族エリートに共通した踏ん切りの悪さであろう。何か惜しいような感情が残る。

「かねて俊乗房重源からも説かれていたのだ。しかし：

…

「しかし、何でしょうか」

弁長は押してくる。

「いまだ少し考えたい。学んでおきたいことがある」

「私ごとき浅学非才の者の口からでは容易にお心を動かすわけにもまいりますまい。一度東山へ法然ご房をお訪ねなさい。しっかりとご房からお聞きになるとよろしい」

確信にあふれた口上で、弁長はこう言いきると、それ以上明遍を強く勧誘はしなかった。

弁長が明遍の学殖と素朴な念仏信仰をどれだけ高く評価していたか、後年になってそれが実証される。肥後の善導寺でおこなわれた念仏結果の授手印の奥書で、弁長は念仏血脈の先師として、大原の顕真と法然との間に明遍の名を併記している事実からも傾解されるであろう。

ちなみに、ひとたび専修念仏へ帰入した明遍は、道元禪師が「正法眼蔵」で書いているように、三論のことを聞かれてもすべて忘れたと答えるだけの純粋な念仏者に変身しているのである。

「ところで私は近々宋へ渡海するつもりでいます」

＜嵯峨二尊院小景＞



弁長は話題を転じた。

「宋へ渡るのか」

「はい。鎮西へまいり渡航の便を待つ所存でおります」

「何のために？」

「念仏の師實相承を受けてまいります」

「それはおぬし自身の発意からか。それとも……」

「わが師からのご下命でございます」

「法然のご房がお命じになったのか」

「はい。命にかえてこのご下命を全うしたく思っております」

明遍は弁長の全容をあらためて見直した。

逞ましい。武士と見まごうばかりの強固な身体の所有者だ。

「うむ、おぬしのような頑丈な身体でなければその重大な使命は達せられまい」

「ただしでございます。現下の宋は、甚だ政情が乱れていると聞きます。渡航には日時がかかると思います。あるいは私一代では達し得ぬ場合もあり得るのです。そのような折、明遍どの。この湛空にご助力を願います」

「助力とは？」

「南都北嶺の追究がきびしくなっています。念仏門における師資相承を、二尊院を略儀にして達成せねばならぬ事態になるかも知れませぬ。師も老年に達しておりま

す。その折は何かとお口添えを願いたく……」
正信房湛空と連れ立ってやってきた本意を、そこで明らかにした。

たしかに師資相承の不満、つまり専修念仏宗が唐仏教とどこでどんな形でつながっているのか、そのあいまいな点を南都北嶺は鋭く追究してくる現状であった。

「ところで、いつも湛空が口にする嵯峨の二尊院じやが、伽藍の復興は緒についているのかな」

「近々大殿の工事にかかる予定です」

「誰か檀那でも？」

「九条兼実さまが法然ご房のために費用の一切を」

「月輪どのがついて下されば心配はないのう」

専修念仏教団が日々に増大となり、内外ともに整備してゆくさまが眼に見えるようであった。

この安元の時点で、二尊院の結構がどこまで整ったのか、記録はない。また九条兼実の協力ぶりも具体的には不明である。

しかし二十余年後の嘉祿年次、例の法然の墓あばきによって遺骸をこの寺へ移した折は立派な伽藍が完成していたようである。スボンサーも九条家ではなくて、鎌倉の北条氏に変わっていたらしい。

二尊院の寺誌によれば中興の祖は法然房源空であって、念仏宗の本山であり、この寺が天台宗へ戻ったのは明治初年からになっている。

現在でも法然の雁塔が大殿の裏山にある。七箇条誓文の在地として一つの歴史上の遺物として扱うのは不当である。浄土門はこの寺の意義を認識し直さねばならない。

ところで聖光房弁長は、この年（元久元年）の八月、鎮西の地へ去ってゆく。目的は師資相承を実現すべく、大陸渡航のためであったことは間違いない。だが、幾多の事情が渡航をはばんだようである。

この師命があつたからこそ、聖光房を二祖とする鎮西派が浄土宗の正統となつた事實は、前にも強調したとおりである。

弁長が京都の地を去ると、同じ年の十月、延暦寺の衆徒は朝廷へ念仏停止を強訴に及んだ。

そのタイミングは、安樂房らが画策した坊門局の妹を鎌倉将軍実朝へ興入れさせる時機にぴったり照準を合わせている事実も見逃してはならない。北条門閥と、後鳥羽体制下では傍流に落ちつつあった坊門家との公武合体――

延暦寺の衆徒を煽動する卿二位兼子やその夫頼実の影が、歴史のバックスクリーンで揺曳している。念仏停止を彼らによる巻き返しと取られなくもない。ちなみに頼実は、坊門家息女の鎌倉興入れが決定した直後、太政大臣の座から追われている。

このあたりをきっかけとして、ひんばんに加えられる念仏門への断庄は、直流の感応とは言えないまでも過敏に振幅する政情の針先と無縁ではなかったようである。

対立する鎌倉北条氏と後鳥羽体制。安樂房連西らを主軸にする念仏ひじりの親北条派は後鳥羽体制にとって小うるさい「政敵」だったのである。

もちろん安樂房らが念仏ひじりのすべてではない。他にももろもろの人材を法然は抱えこんでいた。それだけに刻々に動く政情のなかで、法然は専修念仏宗のありかたを決定するために苦慮しなければならなかった。

安元元年十一月七日。法然は門弟を誡めるための七箇条の制誡を発したのである。

その内容は、

第一条、真言や天台を論破し、阿弥陀仏以外の仏、菩薩をそしめることを誡める。

第二条、有智の人や別行の僧とみだりに争論することとを誡める。

第三条、別解別行の人に、その本行を放棄せしめることを誡める。

第四条、淫楽や酒を勧めて持戒堅固の人を雑行人として侮蔑することを誡める。

第五条、ほしいままに私義を述べだてて争論することとを誡める。

第六条、唱導を好み、無知の道俗を教化することを誡める。

第七条、邪法を正法とし、偽わって師匠の説とすることを誡める。

以上である。

外容だけから判断すると、これは体制派への全面降伏を思わせた。

(つつく)

年 新 賀 謹

〒170 東京都豊島区西巢鴨三二〇—一 大正大学 電話(〇三)九一八—七三一代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六 佛教大学 電話(〇七五)四九一—二二四一代表	淑徳短期大学 学長 長谷川良昭 東京都板橋区前野町五—三—七	京都家政短期大学 学長 大橋俊有
埼玉工業大学 松川文豪	淑徳高等学校 里見達人 東京都板橋区前野町五—一四—一	東海高等学校 滝俊立 〒4% 津島市神守町 阿弥陀寺住職 社会福祉法人 神守保育園理事長	鎮西高等学校 真和中・高等学校長 上田祐規 熊本市九品寺三—一—一
東山学園 石井俊恭	善導大師遠忌 法然上人降誕 慶讃事務局長 〒530 大阪市北区同心一—四—八 漆間純成 九品寺中	鎌倉大仏殿 高德院 佐藤密雄 〒248 鎌倉市長谷四—二—二八	祐天寺 巖谷勝雄

年 新 賀 謹

無量山 伝通院 住職 大河内秀敏	稲田稔界	回向院 本多清敏 〒130 東京都墨田区両国二―八―十	九品仏浄真寺 清水順碩 東京都世田谷区奥沢
蓮勝寺住職 柴田敏夫	称名寺住職 須藤隆仙 〒040 函館市船見町一八―一四 電話(〇一三八)二二―一五七八	中島真哉 青山梅窓院 東京都港区青山二―二六―三八	野呂幸進 教安寺 川崎市川崎区小川町六番地二 電話(〇四四)二二―四九四六
〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一 清岸寺 原口徳正	華陽院 堀田良謙 〒420 静岡市鷹匠二―二四―一八 電話(〇五四)五二―三六七三	近龍寺住職 松濤弘道 〒328 栃木市万町二二―四 電話(〇二八)二二―〇八〇二	光運寺 飯田信弘 四日市市中部三一―二二

年 新 賀 謹

東京都文京区本郷一―八―三 昌清寺 住職 服部仙順 電話(〇三)八一―一三三七一	檀王法林寺 だん王保育園・児童館 信ヶ原良文 京都・三条大橋東詰	光明寺住職 白幡憲佑 横浜市南区庚台(久保山)	西 住 院 戸川 靈 俊 京都市左京区黒谷町三〇
〒606 京都市左京区西寺町仁王門上ル 専念寺 俵口隆成 電話(〇七五)七六一―〇七七〇 七七一―一三九〇	芳泉寺 柳^{なぎ}楽^ら真^{しん}純^{じゅん} 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 上田市常磐城三―七―四八	浄土宗議會議員 安国寺住職 大田 秀 三 高崎市通町九〇 慈光ビル	〒302 取手市白山二―九―二八 弘 經 寺 金田 明 進
廣隆寺住職 谷 地 益 雄 〒045 岩手県花巻市四日町一丁目	晴雲寺住職 塚 田 弘 導 〒254 平塚市立野町六―五	小林 忍 戒 京都市下京区寺町 仏光寺上ル 聖光寺	法然上人鑽仰会

二 編集後記 二

○謹賀新年——新しい陽春を無事に迎えることのできた喜びを、共に分かち合い、共に感謝しながら、十声の念仏の唱和に托して、本年も幸せて明かるい一年が過こせまうように。

○江戸時代中期、信州松代藩真田家の家老、恩田木工民親は、すぐれた藩政改革者として、またその人物の偉大さをもって、往古より知る人ぞ知る。『日暮硯』は、そのもつとも有名な説話録である。勤勉策勵を第一の旨としたその財政手腕もさることながら、その心の大きさ、人格風貌のすばらしさについては、いわゆる私利私欲のために正道をはずれてしまった悪徳藩士に対する瞋目すべき処置をもってして語り継がれている。「木工は一方彼等の旧惡を領民に忌憚なく書き出させて彼等の手脚を奪ったが、しかし、これを以て一言彼等を咎めるでもなく、彼等を自己の相役として推薦

した為に、彼等は感激を以て更生し、藩治のために粉骨するに至った」(岩波文庫本『日暮硯』「解説」より)という。山手樹一郎の言葉借りれば、「信州松代藩に有名な家老がいて、悪人というものはそれだけの器量がなくは、なかなか悪いことはできないものだ。その悪才を良いほうへ導いて使うようにさせれば、きつものの役にたつものだから、と主人にすすめて、悪人を遠ざけなかったという。りっぱな見識だ」(山手樹一郎『又四郎行状記』より)ということになる。年頭からこのようなことを記したのも、この世の善悪、清濁の中にこそ人間の本当の姿が見出されるわけであるし、その人としてのあるがままの生きざまに忠実な人生を送りたい、という私の願いがあるからである。それが、この新しい年への課題。どんなことも避けて通らず、目を見開き、手を差し伸べて精一杯生きたい。

破魔矢挿して一隅寧きくらしあり

きくの

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十五巻 正月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十三年十二月二十五日 印刷
昭和五十四年 一月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四番

〒二二三 振替東京八二一八七番

年 新 賀 謹

總本山 知恩院

門主 岸 信 宏

浄土宗宗務庁

浄土宗宗務支所

大本山 増上寺

法主 藤井実応

大本山 金戒光明寺

法主 藤原弘道

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 清浄華院

法主 高 畠 寛 我

大本山 善導寺

法主 宮本文哲

大本山 光明寺

法主 石井真峯

大本山 善光寺大本願

法主 一 条 智 光

法然上人御降誕地

二十五霊場第一番

誕 生 寺

岡山県久米郡久米南町里方
中国従貫道路大阪より二時間

西 福 寺

稻 岡 覚 順

川口市西川口三一二四一三

滋賀 福泉寺
敦賀 西福寺

鶺 鴒 飼 隆 玄